2019 パリ日本文化会館・日本友の会 ハイライトニュース No.19
MCJP2019 ― No.19 作成日：Friday, February 22, 2019

作成者：館長　杉浦 勉　t.sugiura@mcjp.fr　https://www.jpf.go.jp/mcjp/member/news.html

「ジャポニスム 2018」続報 13

本号では、１月１７日からパリ日本文化会館等で開催された KINOTAYO 現代日本映画祭と昨年９月末から始まった「日本映画の 100 年」の第２部「日本映画再発見」と第３部「現代監督特集」およびその関連イベント「日仏映画交流プロジェクト」について報告致します。

目次

1. KINOTAYO 映画祭　2

第 13 回目となる KINOTAYO 映画祭ですが、今年は「ジャポニスム 2018」の公式企画として開催されました。今年は 13 作品が、パリ日本文化会館やクリュブ・ド・レトワル映画館などパリ市内のほか、ストラスブールやリヨンなど地方都市でも上映されました。

2. 「日本映画の 100 年」　3～4

「ジャポニスム 2018」の公式企画として 2018 年秋から開催された日本映画 100 年の歴史を紹介する事業を第２部と第３部を中心として報告します。第２部「日本映画再発見」-I「4K クラシック映画傑作選」では俳優の有馬稲子さんと香川京子さんが来仏してそれぞれが出演した映画のアフタートークを行い、第 3 部「現代監督特集」では、12 人の監督と俳優の役所公司さん、常盤貴子さん、宮﨑あおいさんらが来仏し、トークを行ないました。

3. 日仏映画交流プロジェクト　5～6

ジャポニスム 2018「日本映画の 100 年」記者発表会を行いました。なおこれに先立ち同日同会場で、日仏両国の映画分野における協力と交流の一層の促進を目的として、公益財団法人ユニジャパンとフランス国立映画センター（CNC）が、「日仏映画ラウンド・テーブル」と、両者間で昨年 7 月に締結された「日仏映画協力協定」の交換式を実施しました。あわせて報告いたします。

注記：本稿で意見に相当する部分は筆者の個人的見解を述べたもので、筆者の所属する組織の統一的見解ではありません。本稿に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するものとします。なお、撮影者の記載がない写真は筆者が撮影したものです。

作成者：館長　杉浦 勉　t.sugiura@mcjp.fr　https://www.jpf.go.jp/mcjp/member/news.html

① KINOTAYO 映画祭

2019 年 1 月 17 日（木）から 2 月 10 日（日）まで第 13 回 KINOTAYO 映画祭がパリ日本文化会館（26 日（土）まで）とパリのクリュブ・ド・レトワル映画館（2 月 1 日から）で開催されました。実はパリは最後の開催地で、同映画祭は 2018 年 11 月から 12 月にかけてサン・マロやポー、ストラスブール、リヨン、シャンベリ、ル・カネ、カンヌ、マルリなどの地方都市で既に催されてきました。主催は国際交流基金と KINOTAYO 映画祭実行委員会ですが、日本貿易振興機構（ジェトロ）とヴァル＝ドワーズ県、笹川日仏財団のほか、多数の企業が協賛しています。

パリ日本文化会館では毎年 KINOTAYO 映画祭実行委員会と連携し、映画祭出品作品を上映してきました。同映画祭は 2005 年に創設されてから、これまで 221 作品が紹介され、1000 回を超える上映がなされ、監督や俳優、プロデューサーなど 75 人が来仏して、観衆との触れ合いをしてきました。

第 13 回目は「ジャポニスム 2018」の公式企画となり、開会式は 1 月 17 日にパリ日本文化会館で行われ、片川喜代治実行委員会協会会長、木寺昌人駐仏日本大使、ヴァル=ドワーズ県代表、筆者等があいさつした後、瀬々敬久監督の『菊とギロチン』という映画に主演した女優木竜麻生さんがゲストとして壇上にたち質疑応答に答えました。その後、上田慎一郎監督による『カメラを止めるな！』が上映されました。

『カメラを止めるな！』は変質者のような監督が、若い男と血にまみれた女性に斧で襲い掛かるシーンから始まり、次々に凄惨な場面が出てくるので、館長として「こんな映画を上映して後でお客さんからクレームが寄せられるのでは」と心配しながら見ていました。実際、そのようなシーンを見て中座して外に出た観客も数人いたほどです。ところが迫真の演技が続いた前半が過ぎ、後半になると打って変わって、前半のシーンの種明かしが始まりました。それが笑い転げるほどに非常に滑稽なものでした。

期間中、①井樫彩監督の『真っ赤な星』、②塚本晋也監督の『斬、』、③榊原有佑監督『栞』、④ロナン・ジル監督の『海の底からモナムール』、⑤小野さやか監督の『恋とボルバキア』、⑥瀬々敬久監督の『菊とギロチン』、⑦山崎貴監督の『DESTINY 鎌倉ものがたり』、⑧関根光才監督『生きてるだけで、愛。』、⑨滝田洋二郎監督の『ラストレシピ～麒麟の舌の記憶～』、⑩想田和弘監督『港町』、⑪上田慎一郎監督の『カメラを止めるな！』、⑫熊澤尚人監督の『ユリゴコロ』、⑬石田祐康監督の『ペンギン・ハイウェイ』の 13 作品が上映されました。

注記：本稿で意見に相当する部分は筆者の個人的見解を述べたもので、筆者の所属する組織の統一的見解ではありません。本稿に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するものとします。なお、撮影者の記載がない写真は筆者が撮影したものです。

作成者：館長　杉浦 勉　t.sugiura@mcjp.fr　https://www.jpf.go.jp/mcjp/member/news.html

そして２月 11 日（月）にクリュブ・ド・レトワルで行われた閉会式で発表された今回の受賞映画は下記の通りでした。

- ✧ ［ソレイユ・ドール］『カメラを止めるな！』上田慎一郎監督
- ✧ ［審査員賞］『生きてるだけで、愛。』関根光才監督
- ✧ ［イデム最優秀映像賞］『栞』榊原有佑監督

KINOTAYO 現代日本映画祭最終日の様子　（KINOTAYO ホームページhttps://kinotayo.fr/jpより）

②「日本映画の 100 年」

「ジャポニスム 2018」の公式企画の中でも長期間にわたって実施されたものは展覧会を除きそれほど多くありませんが、日本映画の 100 年の歴史を紹介した「日本映画の 100 年」事業は 2018 年９月 26 日（水）から 2019 年３月 19 日（火）まで、非常に長期間にわたって実施されました。

全体は３部に分かれ、1920 年代から 2018 年の最新作まで、日仏の専門家が選んだ 119 本がシネマテーク・フランセーズとパリ日本文化会館のほか、リヨンやニース、トゥールーズ、ヴズール等の地方都市でも上映され、2019 年２月末現在総計約 20,000 人の来場者を集めました。

注記：本稿で意見に相当する部分は筆者の個人的見解を述べたもので、筆者の所属する組織の統一的見解ではありません。本稿に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するものとします。なお、撮影者の記載がない写真は筆者が撮影したものです。

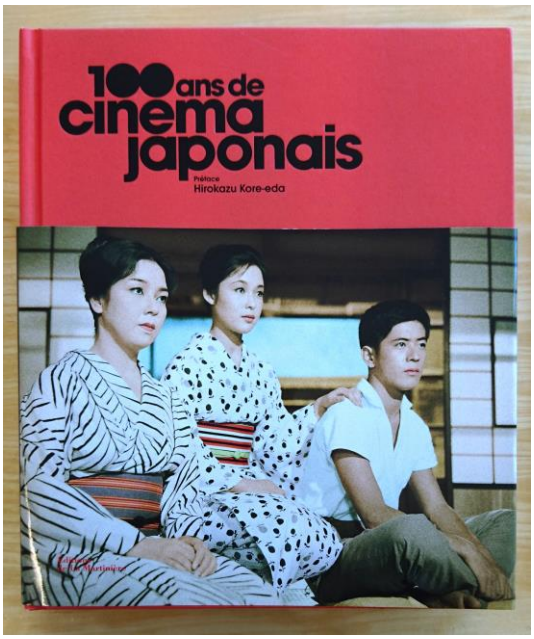
作成者：館長　杉浦 勉　t.sugiura@mcjp.fr　https://www.jpf.go.jp/mcjp/member/news.html

第１部「日本映画の発芽」は、「ハイライトニュースNo.10」でお伝えした無声映画『雄呂血』をはじめ『狂った一頁』や『春琴抄 お琴と佐助』など27作品が、９月26日（水）から10月21日（日）までシネマテーク・フランセーズで上映されました。

「日本映画再発見」と題する第２部は、前半が「4K修復で見直すクラシック映画傑作選」で、パリ日本文化会館で11月21日（水）から12月21日（金）まで開催され、デジタル修復された『浮草』、『七人の侍』など日本映画黄金期の映画23本が上映されました。期間中には、有馬稲子さんと香川京子さんという二大女優がそれぞれの出演した映画の上映会にあわせて来仏し、トークショーを行うとともに、観衆からの質疑応答にも応じました。有馬稲子さんは小津安二郎監督『東京暮色』の上映の際に、香川京子さんは小津安二郎監督『東京物語』と溝口健二監督の『近松物語』『山椒大夫』の３作品の上映会に参加しました。

また、第２部後半は「知られざる傑作映画特集」で、シネマテーク・フランセーズで2019年１月23日（水）から３月10日（日）まで開催され、フランスで知られていない監督による傑作と知られている監督の知られていない傑作の計32作品が紹介されました。

第３部「現代監督特集」は、２月６日（水）から３月にかけてパリ日本文化会館では安藤桃子監督、細田守監督、樋口真嗣監督、沖田修一監督、白石和彌監督、李相日（リー・サンイル）監督、大林宣彦監督、青山真治監督、松永大司監督、岩井俊二監督、濱口竜介監督、阪本順治監督らの全22作品が上映されました。期間中、上記監督12人と俳優の役所広司さん（『キツツキと雨』『孤狼の血』『三度目の殺人』の上映後に登壇）、常盤貴子さん（『誰かの木琴』『花筐/HANAGATAMI』の上映後に登壇）、宮﨑あおいさん（『怒り』『ユリイカ』）らが上映後のトークに参加しました。



公式カタログ『日本映画の100年』（Editions de la Martinière より刊行）

注記：本稿で意見に相当する部分は筆者の個人的見解を述べたもので、筆者の所属する組織の統一的見解ではありません。本稿に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するものとします。なお、撮影者の記載がない写真は筆者が撮影したものです。

作成者：館長　杉浦 勉　t.sugiura@mcjp.fr　https://www.jpf.go.jp/mcjp/member/news.html

③ 日仏映画交流プロジェクト

「ジャポニスム 2018」を契機の一つとして日仏両国の映画分野における協力と交流が今後一層促進するようにとの目的で、2019 年 2 月 15 日（金）に、公益財団法人ユニジャパンとフランス国立映画センター（CNC）が、国際的に活躍する両国の映画監督やプロデューサーを招いての「日仏映画ラウンド・テーブル」と、両者間で昨年 7 月に締結された「日仏映画協力協定」の交換式とを CNC で実施しました。

「日仏映画ラウンド・テーブル」への登壇者たち

「日仏映画協力協定　交換式」への登壇者たち

注記：本稿で意見に相当する部分は筆者の個人的見解を述べたもので、筆者の所属する組織の統一的見解ではありません。本稿に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するものとします。なお、撮影者の記載がない写真は筆者が撮影したものです。

作成者：館長　杉浦 勉　t.sugiura@mcjp.fr　https://www.jpf.go.jp/mcjp/member/news.html

続いてジャポニスム 2018 では同会場にて、「日本映画の 100 年」記者発表会を行い、訪仏した役所広司さん、常盤貴子さん、宮﨑あおいさんら 3 人の俳優と、12 人の映画監督を代表して大林宣彦監督が登壇し、国際交流基金の安藤裕康理事長による「日本映画の 100 年」の紹介に続けて、フランスで自作が上映されることへの思いが語られました。

ジャポニスム 2018「日本映画の 100 年」記者発表会登壇者たち
（©Yurina Niihara Photo: Japan Foundation）

なお、会場には日仏映画人の交流促進を目的に安倍晋三内閣総理大臣の特使として渡仏されていた萩生田光一衆議院議員のほか、株式会社 KADOKAWA の角川歴彦会長、東宝株式会社の島谷能成社長、東映株式会社の多田憲之社長、東宝東和株式会社の山崎敏社長、国立映画アーカイブの岡島尚志館長らも来場していました。

その後イベントホールから場所を移して、フレデリック・ブレダン CNC 理事長による歓迎の辞、萩生田光一総理特使による乾杯の辞、オードレ・アズレー ユネスコ事務局長他による挨拶のあと、関係者による交流会カクテルが開催されました。

以上

注記：本稿で意見に相当する部分は筆者の個人的見解を述べたもので、筆者の所属する組織の統一的見解ではありません。本稿に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するものとします。なお、撮影者の記載がない写真は筆者が撮影したものです。